

## 「大地の芸術祭（新潟）見聞録」

8月中旬、「大地の芸術祭 越後妻有アートトリエンナーレ2009」に行って来ました。2000年に始まり、3年ごとに開催されているイベントで、今回で4回目となります。来年7月19日から約100日間開催される、瀬戸内国際芸術祭の先行モデルとなるものです。

祭りの舞台は、新潟県十日町市と津南町にまたがる760平方キロメートルの大地。長流・信濃川と日本最大規模の河岸段丘、そして日本の原風景とも言える里山と棚田など、キャンバスである自然自体も芸術的です。そして、ここは、日本一おいしいと言われるコシヒカリの産地であり、強烈な造形美を持つ縄文火焔土器が数多く出土しているところです。

そんな舞台の上に地域と都市、アーティストと里山、若者とお年寄りの交流と協働の中から生まれた約370点ものアート作品が展開され、過疎化に悩む中山間地域が、都会から来た若者や家族連れを中心に大勢の見物客でにぎわっていました。

一日半ほどをかけて約30のアート作品を見たり、体験して回りましたが、集落や田んぼ、空き家、廃校を直接利用した展示も多く、まさにアートで自然と地域と住民が一体化していました。

例えば、3年前に廃校になった旧真田きなだ小学校は、絵本作家の田島征三さんに地元の鉢集落のお年寄りたちが山から木の実を集め、飾るなどして全面協力、最後の在校生ユウキ、ユカ、ケンタが主人公の「絵本と木の実の美術館」に生まれ変わっていました。

総合ディレクターを務める北川フラムさんが、この芸術祭を発案されたときに、四国88ヶ所巡りをイメージしたという話を伺いました。「四国遍路」→「古寺巡礼」→「アート巡礼」とつながる一つの行動類型として、新しいムーブメントが出来つつあることも実感しました。

そして来年。巡礼の聖地が高松と瀬戸内の島々に受け継がれていきます。芸術祭開催に向けて、まだまだ課題はありますが、本当に楽しみになってきました。

成功への鍵は、島のお年寄りを中心とした、この瀬戸内地域に住む人々の参加と協働です。みなさんも、一緒にいかがですか。